The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	形容詞に続くto不定詞補文の態について : 後期近代英語を中心に
Author(s)	大津, 智彦
Citation	大阪大学英米研究. 2009, 33, p. 37-56
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/99329
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

形容詞に続く*to*不定詞補文の態について

－後期近代英語を中心に－

大　津　智　彦

1. はじめに

本稿では次の(1)のように形容詞に続く*to*不定詞補文の態(voice)の変異(能動態か受動態か）に関し、後期近代英語から現代英語に至るまでの歴史を調査する。

（1）a That's easy to say.
　　b *That's easy to be said.

この構文は*difficult*、*easy*、*hard*、*pleasant*、*tough*などの形容詞を述部として持ち、続く不定詞節内の他動詞は、主節主語を意味上の目的語とする[1]。過去の変形文法（Transformational Grammar）では*tough-movement*構文として知られるこの構文を、ここではDenison（1998: 184）に従い*easy-to-please*構文と呼ぶことにする。

なお、次の（2a)、(3a）のように自動詞を率いることが可能な*ready*や*fit*などの形容詞は対象外とする。(2b)、(3b）においては今回対象とする構文と同様に能動態と受動態の交替を示すが、これについては別途、独立した調査を行いたい。

（2） a. The guests are ready to depart.（intransitive verb）
b. The onions are ready to cut and dry（be cut and dried）.（transitive verb）

（3） a. The king is fit to rule.（intransitive verb）
b. The apple is fit to eat（to be eaten）.（transitive verb）

以下、セクション2では先行研究に基づいて対象構文の歴史を概観し、3においては今回の調査方法を紹介する。4では結果の提示とその分析を行い、5はまとめと残された課題を記すことにする。

2. 対象構文の歴史的概観

まず、Fischer（1991: 153-79）、Visser（1966: 990-93）、van der Gaaf（1928）、Denison（1998: 184-86）に沿って古英語から現代英語に至るまでの歴史を辿ることにする。

Fischerによると、この構文は（4）のように古英語までさかのぼることができ、古英語では*to*不定詞は必ず能動態であるという。

(4) ælc ehtnys bið earfoðe to þolienne（ÆCHom II, 42 313.110）
'each persecution will be hard to endure'

中英語については、Fischerはvan der Gaafを参考に、*easy-to-please*構文で受動態が用いられる頻度が徐々に増してくるとしているが、*worthy*以外で受動態が使われるのは14世紀終盤以降としている。次に1例を記す。

（5） þe Meyr ... rehersyd many repreuows wordys ... þe which is mor expedient to be concelyd þan expressyd（c1438, Visser（1966: 991）より引用）

van der Gaafは15世紀から16世紀にかけて*easy-to-please*構文に参加する形容詞

の数を挙げ、この構文が後期中英語から初期近代英語にかけて浸透していく様子を示している。

後期近代英語以降はDenisonによると*easy-to-please*構文における能動態と受動態の変異の縮小期で、能動態に統一されていくとしている。ただ、その過程は"passive infinitives took a long time to die out"であるとして1894年を受動態の最後の用例として挙げている。現代英語についてはDenisonは（1b）のとおり*easy-to-please*構文における受動態は非文として扱う。

以上の歴史的推移とは別に、そもそも元は*easy-to-please*構文では能動態が用いられていたところになぜ受動態が用いられるようになったのかを考察しなければならない。Fischerはひとつには、*easy*等とは別のグループに属する*eager*タイプの形容詞が例文（6）のように、後期中英語から初期近代英語にかけて、意味上、受身の場合、受動態の不定詞を率いることができるようになったことが、*easy-to-please*構文において必ずしも受動態を必要としない場合にもその使用を促進した可能性があるとしている。

（6）... feyn［glad］to be dischargid of erþeli goodis（Wycl.Sel.Wks I 246, van der Gaaf 1928: 133より引用）

ふたつ目の理由は、後期中英語期と初期近代英語期にはフランス語およびラテン語から英語へと大量の借入語の流入があったが、借入された多くの形容詞がフランス語やラテン語の特徴を引き継ぎ、同一の形容詞でありながら、行為者とその行為の対象となるもの（物、者）のどちらの視点に立った表現も可能であったことにあるという。そしてこの特徴は英語固有の*easy*タイプの形容詞にも影響を及ぼし、例文（7）のように二通りの構文を生み出すことになったとされる。(7a) はものの方向から描写する古英語由来の構文であるが、(7b) は行為者の方向から描写しており、ラテン語の影響で生まれた構文である。

（7）a. þe visage of a deuill, riȝt hidous and dredefull to see（?a1425 *Mandev.*（Eg）139/3, Fischer（1991: 178）より引用）

b. A seruaund þat is trewe & seruabil & dreful［afraid］to greue or displesin his lord（a1450（c1400-25）Legat Serm.PD 19/23, Fischer（1991: 178）より引用）

筆者自身も17世紀の演劇から次のような用例を見つけた。

（8）I am so easy to beleeue thee.（Marston, J.（1605）*The Dutch Courtezan*）

つまり、*easy*タイプの形容詞が*eager*タイプの構文も持つようになったことになる（主節主語と不定詞の意味上の主語が同一となる）。そうすると、例えば次の（9）のように生物が主語である文があった場合、「メアリーを見るのが恐ろしかった（メアリーは見るも無残な姿だった）」のか（*easy*タイプ）、「メアリーは（なにかを）見るのを恐ろしがった」のか（*eager*タイプ）の間で意味の曖昧さ（ambiguity）が起こるため、前者の意味を出す場合に受動態が用いられるようになった、というのがFischerの考えである。

（9）Mary was dreadful to see.[2)]

Fischerによると形容詞のこのような曖昧さは初期近代英語期の終わりまでには解消されて、*easy*タイプか*eager*タイプにはっきりと区分けされるようになったので、*easy*タイプの形容詞では、もはや受動態にする必要性はなくなったという。現代英語においてはFischerは*easy-to-please*構文で受動態が用いられるのは一部の例外のみであるとし、Denisonは上記（1b）のように受動態を用いた場合は非文であるとしている。

以上、今回対象とする構文の古英語から現代英語にいたるまでの歴史を先行研究に基づいて概観したが、筆者が本稿で特に注目したのは、初期近代英

語期終盤以降*eager*タイプの形容詞における曖昧さが解消され、*easy-to-please*構文で受動態が用いられる必要性がなくなった後、後期近代英語期においてどのような経過を経て、同構文で受動態が消えて行ったかということである。この点についてはDenison（1998: 185-86）が"passive infinitives took a long time to die out"として1894年までの用例を挙げているのみで詳しいことは分かっていない。Denisonの記述からすると1700年代、1800年代にも受動態が使われ続けたと予想されるがそれはどの程度の頻度だったのだろうか。また、1900年代になってからは一切受動態は現れなくなったのだろうか（Fischerのいう例外を除き）。そして、受動態が姿を消す過程においては何らかの傾向があったのだろうか。これらの疑問に答えるため、次セクションよりコーパスを使って行った調査結果を見ていきたい。

3. 調査方法

上に述べたとおり、本稿では*easy-to-please*構文における動詞の態の変異に関し、後期近代英語から現代英語に至るまでの歴史をコーパスを使い調査する。この目的のために今回用いたコーパスは、主にProject GutenbergおよびOxford Text Archiveなどからダウンロードした1700-1928年までのイギリス散文文学作品（詳細は付録を参照）のテキストファイルとWeb上で検索が可能なBYU-BNC: The British National Corpusのfiction_proseのジャンルである。

コーパスを時代を通してイギリスの散文文学に統一したのは、テキストの性格に一貫性を持たせるためだが、問題となるのは、同じジャンルであっても時代の経過に従ってその性格に変化が生じることである。Biber & Finegan（1989, 1992）によると、fiction、dialogue in fiction、dialogue in drama、essays、lettersの調査した５つすべてのジャンルにおいて、17世紀から現代に至るまでの間に、より口語的（oral）な文体への流れ（drift）があったという。*easy-to-please*構文における動詞の態の変異が口語的あるいは文語的であるという文体に影響を受けるかどうかについては現在までのところ明らかになっ

ていない。しかし、次セクションで明らかになるように、後期近代英語期中に、*easy-to-please*構文における動詞の態には文体の流れでは説明できないような急激な変化がある。よって、本稿では文体と*easy-to-please*構文における動詞の態との関係にまでは踏み込まず、まずは全体的な構図を示すことを目的とする。

対象となる構文は*easy-to-please*構文であるが、(10a) のように形容詞が述部になるものの他、(10b) のように後置形容詞句となる場合、(10c) のように目的補語となる場合を含む。

(10) a. And, I think, the reason is easy to be assigned. (Swift 1704)

b. If Mr. Dombey in his insolence of wealth, had ever made an enemy, hard to appease and cruelly vindictive in his hate, even such an enemy might have received the pang that wrung his proud heart then. (Dickens 1846)

c. I found some of it hard to endure. (Wells 1896)

用例の収集に際しては、頻度の高さから*difficult*、*easy*、*hard*をキーワードとし、コンコーダンサーでこれらの形容詞を含む文をすべて検索した後、手作業で対象構文に合致する用例のみを抽出した。この手作業の部分は非効率的に思えるかもしれないが、多数の用例を実際に読みこなすことは、研究対象に対する勘を養うよい機会であることを付け加えておきたい。

4. 結果と分析

4.1 時代別傾向

後期近代英語における*easy-to-please*構文の受動態例とは次のようなものである。(11) は1700年代、(12) は1800年代から各形容詞の例を挙げている。

(11) a. ... the real sentiments of young ladies were very difficult to be understood.

(Fielding 1749)

b. ... the covering was now too thin, and easy to be seen through. (Richardson 1740)

c. This is, perhaps, hard to be done. (Boswell 1791)

(12) a. The task she had in hand was one very difficult to be accomplished. (Trollope 1871)

b. The price is small, and easy to be paid. (Dickens 1841)

c. Existence would become a burden hard to be endured. (Brontë, A. 1847)

いずれの例も現代英語においては能動態を使うのがより自然に思われるが、後期近代英語期にはこのような用法がどの程度の頻度で現れたのだろうか。

表1から表3にそれぞれ1700年代、1800年代、1900－1928年までの能動態、受動態の用例数と受動態の占める割合を示した。各時代において、受動態が占める割合に三つの形容詞間で大きな差は見られず、平均を取ると順番に48%、12%、1%となる。1700年代には半数前後のケースで受動態が現れ

表1　1700年代における態の変異

	1700年代				
		能動態(a)	受動態(b)	合計	b/a+b(%)
difficult	1700-1749	10	9	19	47
	1750-1799	17	11	28	39
	小計	27	20	47	43
easy	1700-1749	12	17	29	59
	1750-1799	7	8	15	53
	小計	19	25	44	57
hard	1700-1749	6	8	14	57
	1750-1799	9	4	13	31
	小計	15	12	27	44
合計		61	57	118	48

表2　1800年代における態の変異

	1800年代			
	能動態(a)	受動態(b)	合計	b/a+b(%)
difficult	53	6	59	10
easy	37	5	42	12
hard	52	9	61	15
合計	142	20	162	12

表3　1900－1928年における態の変異

	1900－1928年			
	能動態(a)	受動態(b)	合計	b/a+b(%)
difficult	35	0	35	0
easy	16	1	17	6
hard	25	0	25	0
合計	76	1	77	1

ていたものが、1800年代には1割程度まで激減し、1900年代初頭にはほぼ消滅したことを示す[3)]。Denison（1998: 185-86）が"passive infinitives took a long time to die out"として1894年の用例を最終例として挙げているが、表1から表3の結果はこのDenisonの観察とも符合する。なお、BYU-BNC: The British National Corpusのfiction_proseからは対象構文の受動態不定詞は一例も見つからなかった。

これで*easy-to-please*構文における受動態衰退のペースが明らかになった。上にも述べたとおり、Fischer（1991: 179）は現代英語の*easy-to-please*構文において受動態が用いられなくなった理由は、例文（7a,b）に見られるような意味の曖昧さをもっていた形容詞が初期近代英語の終わり（1700年ごろ）までに*easy*タイプか*eager*タイプのどちらかに属するようになり、受動態を用いて曖昧性を解消する必要性がなくなったためであるとしている。しかし、上の表1や表2から窺えるように、受動態を用いる必要性がなくなった後も約200年にわたって受動態の*easy-to-please*構文が使われ続けたのはどういうわ

けであろうか。このようなケースにおいて200年という期間の長短を論じるのは不可能であろう。しかし、そもそも*easy-to-please*構文で受動態が使われたのはどの程度、意味の曖昧さを回避するためであったのかを問うてみる価値はあるだろう。次のセクションではこの点について考察することにしたい。

4.2 意味の曖昧性と態

例文（7）－（9）のように*dreadful*や*easy*タイプの形容詞が意味の曖昧さを持っていた時代、それらの形容詞に続く*to*不定詞補文の曖昧さは特に主節の主語が生物の時に起こりやすいはずである。例えば例文（8）の*Mary*を（13）のように*The sight*に変えた場合、意味の曖昧さは起こりえない。

（13）The sight was dreadful to see.

受動態が用いられた理由が、こういった曖昧さを避けるためかどうかを検証するために、受動態を用いた頻度が平均49％とまだ高かった1700年代に関して、主語が生物か無生物かを能動態、受動態両方のケースについて調査してみた。なお、（10b, c）のように形容詞+不定詞の部分が後置形容詞句や目的補語になる場合は、それぞれの該当部分を主節文に置き換えて考えるものとする。

表４　主語が生物か無生物かによる頻度の分布（1700 年代）

	能動態			受動態		
	生物(a)	無生物(b)	(a)/(a)+(b)	生物(a)	無生物(b)	(a)/(a)+(b)
difficult	1	26	4%	3	17	15%
easy	2	17	11%	4	21	16%
hard	5	10	33%	4	8	33%
合計	8	53	13%	11	46	19%

表４から分かるのは、いずれの形容詞においても、能動態、受動態の区別なく、主語が無生物の場合が圧倒的に多いことである。つまり、上述したよ

うな曖昧性がおこる機会が少ないわけであって、曖昧性ゆえに受動態が増加したというのは説得力を欠いていると言わざるを得ない。

次に挙げるとおり、確かに主語が人である場合、受動態の使用が曖昧性を避けるのに役立っている場合もある。

(14) I am not more easy to be deceived than another. (Fielding 1749)

しかし、主語が人であっても曖昧性を避けるために受動態が用いられていると言い難い場合も多い。

(15) They talk as if she were as hard to be found as a hare in a frosty morning. (Johnson 1779)

(16) He was too compact, too much broken into hints, as it were, and therefore too difficult to be understood. (Boswell 1791)

(17) Miss (permit me, dear Madam, to subjoin) is a very good tempered child, easy to be persuaded, and I hope loves me dearly. (Richardson 1740)

これらの例では、意味上、受動態を取ることは不自然ではないが、曖昧性を避けるという理由で受動態にする必要性が感じられない。文脈が十分な助けとなり、能動態でも支障はないからである。まして下記のように主語が無生物になっている大多数のケースにおいて、曖昧性の回避が受動態の理由であるとは思えない。

(18) The real sentiments of young ladies were very difficult to be understood. (Fielding 1749)

(19) Louisa packed up her things, as she had been commanded, tho' with what confusion of mind is not easy to be expressed. (Haywood 1744)

(20) Your customers come to your shops or stalls with nothing but brass, which you

likewise find hard to be got.（Swift 1724）

念のためにカイ二乗検定を用いて、3つの形容詞の合計部分の数字について、主語が生物か無生物かによって能動態、受動態の差が生まれるかを解析してみたが、両者間に有意性は全く認められず、主語が生物の場合、特に受動態を選ぼうとする傾向は見られなかった（P値 = 0.361119）。

以上のことから、少なくとも*difficult*、*easy*、*hard*に関しては、これらを用いた不定詞構文において近代英語期に見られる受動態は、*eager*タイプの不定詞構文の解釈との曖昧性を排除するために生じたという理由は必ずしも成り立つものではないということが分かる[4]。

ではなぜこれらの形容詞を用いた不定詞構文で受動態が生まれ、そして消えて行ったのか。なぜ*easy*タイプで受動態が生じたかについては、セクション2で述べたとおり、*eager*タイプの不定詞構文で受動態が用いられるようになったことの影響を受けたことは十分考えられる。そういった例の中には、van der Gaaf（1928: 133）が指摘するように意味と形式の一致を遂げるため、つまり受身の意味を表すために受動態が採られたケースも多かったであろう。例えば次のような例文では、*easy to be*、*hard to be*、*difficult to be*を取り去った後の受動態文はごく自然な英語である。

(21)（=（10a））And, I think, the reason is easy to be assigned.（Swift 1704）

(22) You are so hard to be pleased.（Fielding 1749）

(23) In reality, true nature is as difficult to be met with in authors, as the Bayonne ham, or Bologna sausage, is to be found in the shops.（Fielding 1749）

実際に次のような例文が見つかる。

(24) This is, perhaps, hard to be done; yet it has been done by many.（Boswell 1791）

また、次の例文では直前の"willing to please"との対比のため"easy to be pleased"というように受動態が用いられているのである。

(24) He was a companion communicative and attentive, of unaffected manners, of manly cheerfulness, willing to please, and easy to be pleased. (Boswell 1791)

このように受動態は曖昧性の回避というよりも、意味上の有用性という積極的理由で用いられたと思われる。では曖昧性が*easy*タイプの不定詞構文の出現の理由でないとすれば、曖昧性の消失もその衰退の理由になりえない。そこで近代英語後期以降、なぜ*easy*タイプの不定詞構文において受動態が衰退して行ったのかを次のセクションで探りたい。

4.3 受動態衰退の理由

Denison (1998: 185) は*easy*タイプの不定詞構文において受動態が衰退し、能動態が生き残った理由として、能動態は例文 (25) のように*for*の後に主語を伴う構文と一致する利点があるからだとしている。

(25) and their comments were pleasant *for* me to hear (=Denisonの (259' a))

しかし、次の例を見れば分かるように、現代英語において*ready*などの形容詞では、「for + 主語」を伴うa文があるにもかかわらず、能動態のb文だけではなく受動態のc文も可能なのである[5]。よって、*easy*タイプの不定詞構文において、受動態の衰退に「for + 主語」を伴う能動文がどれだけ寄与したかについては疑問が残る。

(26) a. The contract is ready for you to sign.
b. The contract is ready to sign.
c. The contract is ready to be signed.

現代英語において受動態の不定詞構文を率いる*eager*タイプや*ready*タイプの形容詞と、その用法が衰退した*easy*タイプの形容詞の大きな違いは、後者はいわゆる*tough*-movementを容認するのに対して、前者はそれを容認しないことである。

(27) a. It was easy for her to trace the progress of his emotions.
b. The progress of his emotions was easy for her to trace.
(28) a. I am eager to sign the contract.
b.*It is eager for me to sign the contract.
(29) a. The contract is ready to sign.
b.*It is ready to sign the contract.

ただし、*easy*タイプの形容詞でも不定詞部分が受動態の場合、*tough*-movementは現代英語ではもちろんのこと、歴史的に見ても不可能である。

(30) a. The meaning is not very easy to be found. (Boswell 1791)
b. *It is not very easy to be found the meaning.

では以上のことと*easy*タイプの不定詞構文において受動態が衰退したこととの間にどのような関係があるのだろうか。*easy*タイプの形容詞は他の形容詞とは異なり歴史的に見ても原則として*tough*-movementが可能である。(27a)、(27b) のような構文は少なくとも中英語時代から存在する[6]。ところが後期中英語から初期近代英語にかけて*easy*タイプの不定詞構文において増加した (30a) のような受動態構文には (27a) に対応する構文がなく((30b) は非文)、*tough*-movementは見られない。そうすると受動態は*tough*-movementがないという意味で本来の*easy*タイプの形容詞の用法から外れてしまうことになり、例外的な用法として不安定な状態にあったため時間の経過とともに淘汰されたのではないだろうか。言い換えれば、*easy*タイプの形容

詞では（27a）のような文があるがゆえに（27b）のような能動態の文が支配的な立場を保ち、そのようなペアを成さない受動態は衰退していった可能性があるということである。それに対して、*eager*タイプや*ready*タイプの形容詞では*tough*-movementはないので能動態のみが支配的になることがないのである。

5. まとめ

以上、*easy*タイプの形容詞に続く不定詞構文の態について、先行研究を参考に歴史的概観を行った後、コーパスによる調査を実施し、後期近代英語以降、受動態が衰退・消滅していく様子を示し、その理由を考察した。後期近代英語以降の受動態の衰退・消滅に関しては既知のことであったが、コーパスを用いることによって、その様子を数値によって具体的に示すことができた。衰退・消滅の理由については、Fischer（1991: 179）が挙げる、初期近代英語終盤時における*easy*タイプの形容詞の曖昧性の解消や、Denison（1998: 185）のいう「for + 主語」を伴う能動文の影響を全く否定するわけではないが、主要な要因とするには説得力が欠く部分がそれぞれにあることを指摘した。筆者は、能動態、受動態ともに許す*eager*タイプ、*ready*タイプの形容詞と能動態しか許さない*easy*タイプの形容詞を分かつ大きな特徴が、後者では*tough*-movementが成り立つことにあることに着目した。*tough*-movementは不定詞節内の他動詞が能動態の場合しか成立しないので、ペアの片方だけ受動態で存在するということは、同じ*easy*タイプの形容詞でありながら不均衡な状態であるため受動態は消失して行ったと考えた。他方、*eager*タイプ、*ready*タイプの形容詞ではそのような制約がないため能動態、受動態の両方が許される。なお、この推論においては*tough*-movementの心理的実在性（psychological reality）を認めることになる。

今後の課題としては、今回の研究では調べられなかった文体（文語か口語か）による違いである。*easy*タイプの形容詞に続く不定詞節で受動態が浸透

したのは後期中英語から初期近代英語にかけてだとされるが、文体による違いがどの程度あったのかは未知の領域である。また、van der Gaaf（1928: 137）は現代英語において受動態が使われるケースは文語、口語によって相当の差があると予想しているが、実態はまだ知られていない。van der Gaaf の論文自体が古いので、この問題は*easy*タイプの形容詞における後期近代英語以降の受動態の衰退・消失の中で扱わなければならない。また、今日の英語においてはDenison（1998: 184）は受動態の使用を非文であるとしているが、Fischer（176-177）は例外の存在を認めている。今回、BNCを使った調査では受動態の例は確認できなかったが、さらに対象コーパスの範囲を広げて、例外の洗い出しとそういった例外が生き残った理由を考察するのも興味深い。

注

1）一連の形容詞についてはHuddleston, R. & G. K. Pullum (2002: 1246) のリストを参照。

2）ここでは例（7）に合わせ*dreadful*は意味の曖昧さを持つと仮定している。もちろん現代英語には*dreadful*を含む構文にこのような意味の曖昧さはない。

3）なお、初期近代英語の終了は何年位かについては、従来より1650年から1700年と考えられているが（Baugh, A. C. & T. Cable(1951: 249)、Barber(1976:13)）、*The Cambridge History of the English Language*ではVol. IIIとVol.IVの境目が1776年に設けられていたり、Strang（1970）でも章の区切りを1770年でつけており、完全な意見の一致があるわけでない。そこで1700年代に限り、前半と後半に分けて集計してみた（表1）。パーセント表示を比較してみると、3つの形容詞とも、後半の方が受動態の比率が低いが、カイ二乗検定による統計的有意性は認められなかった。

4）Denison（1998: 185）も*hard*や*easy*の用例に言及しながら、これらの形容詞が*eager*タイプの構文（例えば（7b）や（8））に参加する頻度は、"They were never common."と言っている。

5）ちなみにBNCの検索で、"ready to sign"が1例、"ready to be signed"が1例見つかった。両者ともceasefireを主語としている。

6）Visser（1966: 963-965, 990-993）を参照。

参考文献

Barber, C. 1976. *Early Modern English*. London: André Deutsch.

Baugh, A. C. & T. Cable. 1951. *A History of the English Language*. London: Routledge.

Biber, D. and E. Finegan. 1992. "Drift and the Evolution of English Style: A History of Three Genres," *Language* 65: 487-517.

Biber, D. and E. Finegan. 1992. "The Linguistic Evolution of Five Written and Speech-Based English Genres from the 17th to the 20th Centuries." in Rissanen, M., O. Ihalainen, T. Nevalainen, and I. Taavitsainen, eds, *History of Englishes, New Methods and Interpretations in Historical Linguistics*. Berlin: Mouton de Gruyter. 688-704.

Davies, Mark. 2004. BYU-BNC: The British National Corpus. Available online at http://corpus.byu.edu/bnc.

Denison, D. 1998. "Syntax." In Romaine, S. ed. The Cambridge *History of the English Language*, Vol. IV. Cambridge: Cambridge University Press. 92-329.

Fischer, O. 1991. "The Rise of the Passive Infinitive in English." in Kastovsky, D. ed. *Historical English Syntax*. Berlin: Mouton de Gruyter. 141-88.

Huddleston, R. & G. K. Pullum. 2002. *The Cambridge Grammar of the English Language*. Cambridge: Cambridge University Press.

Strang, Barbara M. H. 1970. *A History of English*. London: Methuen.

van der Gaaf, W. 1928. "The Post-Adjectival Passive Infinitive," *English Studies* 10: 129-38.

Visser, F. Th. 1966. *An Historical Syntax of the English Language*, Vol. II. Leiden: E. J. Brill.

付録

1700年代

Arbuthnot, John

1712 *The History of John Bull*

Austen, Jane

1796 *Jane Austen's Letters to Her Sister Cassandra and Others*

Barker, Jane

1715 *Exilius*

Beckford, William Thomas

1783 *Dreams, Waking Thoughts, and Incidents*

Berkeley, George

1709 *An Essay Towards a New Theory of Vision*

1710 *A Treatise Concerning the Principles of Human Knowledge*, Part I

1713 *Three Dialogues between Hylas and Philonous*
1729 *George Berkeley to Samuel Johnson* 1
1730 *George Berkeley to Samuel Johnson* 2

Boswell, James
1785 *The Journal of a Tour to the Hebrides* (1773)
1791a *Life of Johnson* (1709-1765)
1791b *Life of Johnson* (1765-1776)
1791c *Life of Johnson* (1776-1780)
1791d *Life of Johnson* (1780-1784)

Burke, Edmund
1777 *Address to the British Colonists in North America*
1790 *Reflections on the Revolution in France*

Congreve, William
1692 *Incognita; or, Love and Duty Reconcil'd*
1693a *The Old Bachelor: a Comedy*
1693b *The Double Dealer*
1695 *Love for Love*
1697 *The Mourning Bride*
1700 *The Way of the World*

Defoe, Daniel
1719 *Robinson Crusoe*
1722 *Moll Flanders*

Edgeworth, Maria
1796 *The Parent's Assistant*

Fielding, Henry
1742 *Joseph Andrews*
1749 *History of Tom Jones, a Foundling*
1751 *Amelia*, Volumes 1-3

Gay, John
1711 *The Present State of Wit*
1728 *The Beggar's Opera*

Godwin, William
1794 *Things as They Are or the Adventures of Caleb Williams*

Goldsmith, Oliver
1765 *The History of Little Goody Two-Shoes*
1766 *The Vicar of Wakefield*

Haywood, Eliza Fowler
1744 *The Fortunate Foundlings*
1748 *Life's Progress Through the Passions*

Johnson, Samuel
1729 *Samuel Johnson to George Berkeley* 1
1730 *Samuel Johnson to George Berkeley* 2
1775 *A Journey to the Western Isles of Scotland*
1779-81a *Lives of the Poets* — Volume 1
1779-81b *Lives of the Poets* — Volume 2
1779-81c *The Life of Ascham*

1779-81d *The Life of Browne*
1779-81e *The Life of Milton*

Manley, Delarivier
1714 *The Adventures of Rivella*

Radcliffe, Ann
1794 *The Mysteries of Udolpho*
1797 *The Italian, or the Confessional of the Black Penitents*

Richardson, Samuel
1740a *Pamela*, I
1740b *Pamela*, II

Smollett, Tobias George
1753 *The Adventures of Ferdinand Count Fathom*
1760 *The Adventures of Sir Launcelot Greaves*
1766 *Travels through France and Italy*

Sterne, Laurence
1759-67 *The Life and Opinions of Tristram Shandy, Gentleman*, Vols. 1-9
1768 *A Sentimental Journey Through France and Italy*

Swift, Jonathan
1704 *A Tale of a Tub*
1710-13 *The Journal to Stella*
1724-25 *The Drapier's Letters*
1726 *Gulliver's Travels*

Walpole, Horace
1735-48 *The Letters of Horace Walpole, Earl of Orford* — Volume 1
1749-59 *The Letters of Horace Walpole, Earl of Orford* — Volume 2
1759-69 *The Letters of Horace Walpole, Earl of Orford* — Volume 3
1764 *The Castle of Otranto*
1770-97 *The Letters of Horace Walpole, Earl of Orford* — Volume 4

1800年代

Austen, Jane
1796-1817 *Jane Austen's Letters to Her Sister Cassandra and Others*
1811 *Sense and Sensibility*
1813 *Pride and Prejudice*
1814 *Mansfield Park*
1815 *Emma*
1818a *Persuasion*
1818b *Northanger Abbey*

Brontë, Anne
1847 *Agnes Grey*
1848 *The Tenant of Wildfell Hall*

Brontë, Charlotte
1847 *Jane Eyre*

Brontë, Emily
1847 *Wuthering Heights*

Carroll, Lewis
1865 *Alice's Adventures Under Ground*
1871 *Through the Looking-Glass*

Coleridge, Samuel Taylor
1817 *Biographia Literaria*

Collins, Wilkie
- 1860 *The Woman in White*
- 1868 *The Moonstone*
- 1878 *The Haunted Hotel*

Conrad, Joseph
- 1895 *Almayer's Folly*
- 1896 *An Outcast of the Islands*

Dickens, Charles
- 1841 *Barnaby Rudge*
- 1843 *A Christmas Carol in Prose : being a Ghost Story of Christmas*
- 1846-48 *Dombey and Son*
- 1860-61 *Great Expectations*
- 1867 *No Thoroughfare*

Disraeli, Benjamin
- 1826 *Vivian Grey*
- 1833 *Alroy or The Prince of the Captivity*

Edgeworth, Maria
- 1800 *Castle Rackrent*
- 1812 *The Absentee*

Eliot, George
- 1859a *Adam Bede*
- 1859b *The Lifted Veil*
- 1861 *Silas Marner*
- 1864 *Brother Jacob*
- 1871-72 *Middlemarch*

Gaskell, Elizabeth
- 1851 *Cranford*
- 1857 *The Life of Charlotte Brontë*

Hardy, Thomas
- 1887 *The Woodlanders*
- 1891 *Tess of the d'Urbervilles*
- 1895 *Jude the Obscure*

Lytton, Edward Bulwer Lytton
- 1834 *The Last Days of Pompeii*

Maugham, William Somerset
- 1897 *Liza of Lambeth*

Peacock, Thomas Love
- 1816 *Headlong Hall*
- 1831 *Crotchet Castle*

Scott, Walter
- 1814 *Waverley*
- 1816a *The Antiquary*
- 1816b *The Black Dwarf*
- 1818a *Rob Roy*
- 1818b *The Heart of Mid-Lothian*
- 1819a *Ivanhoe*
- 1819b *A Legend of Montrose*
- 1825 *The Talisman*

Shelley, Mary
- 1818 *Frankenstein*
- 1826 *The Last Man*

Stevenson, Robert Louis
- 1882 *New Arabian Nights*
- 1883 *Treasure Island*
- 1886b *The Strange Case of Dr Jekyll and Mr Hyde*
- 1886a *Kidnapped*
- 1891 *In the South Seas*

Stoker, Bram
- 1897 *Dracula*

Trollope, Anthony
- 1863 *Rachel Ray*
- 1864 *Can You Forgive Her?*
- 1869 *Phineas Finn*
- 1871 *The Eustace Diamonds*, vol. I

1874a *Phineas Redux*
1874b *Lady Anna*
1881a *Ayala's Angel*
1881b *Dr. Wortle's School*

Wells, Herbert George
1895 *The Time Machine*
1896 *The Island of Dr Moreau*
1897 *The Invisible Man*
1898 *The War of the Worlds*

1900年代初期

Conrad, Joseph
1900 *Lord Jim*
1904 *Nostromo: A Tale of the Seaboard*

Doyle, Arthur Conan
1904 *The Return of Sherlock Holmes*
1906 *Sir Nigel*
1912 *The Lost World*

Galsworthy, John
1906-21 *The Forsyte Saga*

Joyce, James
1914 *Dubliners*
1916 *A Portrait of the Artist as a Young Man*
1922 *Ulysses*

Kipling, Rudyard
1901 *Kim*
1906 *Puck of Pook's Hill*
1916 *Sea Warfare*

Lawrence, David Herbert
1920 *Women in Love*
1925 *St. Mawr*
1928 *Lady Chatterley's Lover*

Maugham, William Somerset
1908 *The Magician*
1915 *Of Human Bondage*
1919 *The Moon and Sixpence*

Saki
1904 *Reginald*
1910 *Reginald in Russia*
1914 *When William Came*

Stoker, Bram
1905 *The Man*
1909 *The Lady of the Shroud*
1911 *The Lair of the White Worm*

Walpole, Hugh
1916 *The Dark Forest*
1922 *The Cathedral*